

12 マイセン磁器と食文化

—景德鎮・伊万里・マイセン—

浜 本 隆 志

Takashi HAMAMOTO

1 景德鎮・伊万里・マイセン

1.1 海上の道

マルコ・ポーロ（1254-1324）が1270年末からイタリアを出発し、シルクロードをへてユーラシア大陸を大旅行したことは、すでによく知られている。その25年にもわたる旅行記『東方見聞録』（1298）は、ヨーロッパの人びとに東洋に関する情報を与えた。とくに商人の目からみた金銀宝石、香辛料についての記述は、ヨーロッパ人に大きな関心を惹き起こした。それとともにかれは、本報告で採り上げる中国陶磁器についても、『東方見聞録』のなかで触れている。こうしてヨーロッパ人は、当時でも陶磁器について情報をもっており、またシルクロードをへて細々と流入していた陶磁器に、憧れを抱いていた。

陸のシルクロードと並行して、中国からインド洋の海岸線にそった海上輸送と、陸路を併用したアジア・ヨーロッパ・ルートも存在したが、これはおもにアラビア商人によって担われていた。陶磁器については、このルートでは一部陸路という制約のため、輸送量はやはり小規模にならざるをえなかった。

やがて15世紀末から大航海時代に入り、ヴァスコ・ダ・ガマ（1469ごろ-1524）がインド航路（1497-98）を発見した。いわゆるこの海のシルクロードを通じ、東洋磁器が大量にヨーロッパへもたらされるようになった。航海はアフリカの大西洋海岸線沿いに南下し、喜望峰をまわり、インド洋の南緯度に常に吹いていた貿易風を利用した。

まず海上ルートの磁器輸入は、ポルトガルが先鞭をつけた。1557年にポルトガル船がマカオに渡来し、景德鎮の磁器をヨーロッパへ搬送した。その後、ヨーロッパではスペインが1580年にポルトガルを併合し、海上の覇権を握るが、やがて17世紀にオ

ランダが、次に18世紀になるとイギリスが台頭し、アジア貿易を牛耳っていく。とくにオランダは景德鎮のみならず、コーヒーの取引もおこない、ヨーロッパの食文化や食器にも大きな影響を与えた。

ヨーロッパ列強は、アジアにも目を向け、競ってアジア貿易の拠点である東インド会社を設立する。1600年にイギリスが、その後、1602年にオランダ、1604年にフランスがそれに続いた。やがてかなり遅れて1728年にデンマークが、1731年にスウェーデンが同様にアジアへ進出していった。ヨーロッパから中国への航海は、東インド会社設立初期では、最短18ヶ月という記録があるが、ふつう2-3年かかった。

ヨーロッパ各国はアジア貿易を重視したが、かれらが海難の危険をおかしてでも、アジア貿易に執念を燃やしたのは、ヨーロッパにおいて磁器の需要が大きく、かつこれが莫大な富を生み出すものであったからだ。有名な景德鎮の磁器は、ヨーロッパの王侯貴族の異国趣味に合致し、大いに人気を博した。と同時に、17-18世紀のコーヒー、紅茶文化を反映して、景德鎮のカップ、ポット類が好まれた。

1.2 景德鎮と伊万里

中国では2000年も以前から、世界に先駆けて焼き物の技が発達していたが、景德鎮の名は、宋の景德帝の命によって白磁が宮廷に納められるようになったことによる。すなわちここでは、磁土「カオリン」（珪酸アルミニウムを主成分とし、長石、雲母を含む）を一度1300度以上の高温で焼き、その後、染付け、色絵付けをしてから、低温で2度焼きする技術が開発され、透明度のある硬質のいわゆる景德鎮磁器が完成していた。

これは上述の海上のルートを通じ、ヨーロッパに輸出されたが、その中心的な役割を担ったのは、新興国オランダであった。1608年からオランダ東インド会社は、本格的に中国の景德鎮貿易をおこなった。扱っていた磁器は、大皿、小皿、バター皿、スープ皿、からし壺、果物皿、コーヒーポット、デザート皿など、ほとんど洋食器であった。点数として多かったのは、コーヒー、紅茶セットで、これはヨーロッパにおいてコーヒーや紅茶が広く飲まれるようになった食文化を反映している。フランスは、オランダのアムステルダムを経由して中国磁器を購入していた。

ところが、明朝から清朝への王朝交代（1644年に明の滅亡）がおり、この政変のため、景德鎮の製造がストップしてしまう。景德鎮の衰退によって、着目されたのが日本の伊万里であったが、景德鎮と伊万里を結びつけたのは朝鮮窯である。朝鮮半島には磁器の製造技術が中国から伝播し、すでに水準の高い磁器が製造されていたから

である。

たまたま豊臣秀吉の朝鮮出兵のおりに、鍋島藩が朝鮮の陶工、李三平の陶工集団を九州へ移住させ、その後、かれらは日本初の磁器（1616）製造をした。こういう経験をへて、伊万里にも磁器技術が伝播していた。さらに金彩をほどこし、色彩豊かな柿右衛門手（手は作風を受け継いだ製品）は、伊万里のひとつの特徴をなすものでもあった。

オランダはヨーロッパ諸国のなかでは、鎖国後でも日本と交易をおこなっていた唯一の国であったが、オランダ東インド会社は、1650年代の終りごろ、かれらの望む製品を伊万里の窯元に焼かせてみた。その結果、当時の伊万里の製品に満足したので、景德鎮に代わって、ヨーロッパへの輸出用に伊万里焼を発注するようになった。とくに地理的にも、長崎に近い有田から製品を搬出できるために、オランダ東インド会社は伊万里を多数買い付けた。

当時、日本とオランダの貿易が盛んであり、こうして伊万里が太平洋、インド洋、大西洋をへて、はるかアムステルダムへ輸出された。オランダはすでに東洋貿易によって莫大な富を獲得していたが、とくにヨーロッパでは、日本風色絵、柿右衛門手の赤絵が人気で、これは当時のバロック・ロココ時代のヨーロッパの芸術風潮と合致した。

ただし、日本の伊万里焼がヨーロッパでもてはやされた時代は、それほど長く続かなかった。やがて政情が安定してきた清が、1680年代後半になると景德鎮の生産に力を入れたので、この磁器がヨーロッパにも輸出され、日本を圧倒するようになった。いずれにせよ 17-18 世紀の前半まで、アジア製磁器はヨーロッパ人の垂涎の的であった。

2 ヨーロッパのマイセン窯

2.1 マイセン磁器の成功

ヨーロッパの王侯貴族は、はるか遠く東洋から運ばれてくる磁器の質感、美しい絵付けに魅了された。イタリアのメディチ家は、15世紀に全盛期を迎えるが、地中海貿易を通じ、早くからアラブ世界と接触していたので、アラブ経由の中国磁器に強い関心を示していた。

イタリアのジノリ窯は 16 世紀から貴族趣味に合致する陶器製造をしていたが、しかしガラス細工の先進国イタリアでも、磁器についてはせいぜい擬似製品しか製作でき

なかった。同様にオランダが自力で磁器製造を試みるが、ここでも完成をみることはなかった。その後、デルフト窯が焼物の伝統を引継ぎ有名になっていく。これは高価な磁器を買うことができなかった庶民に対して、それに代わる陶器の需要をまかなう役割も果たした。

18世紀にはフランスのブルボン王朝、オーストリアのハプスブルク、ドイツのザクセン、プロイセンの各王室が中国磁器に大いなる関心を示した。とくにアウグスト強王（1670-1733）は、フランスの宮廷で中国産の景德鎮をみずから観て、早くから磁器蒐集に執念を燃やしていた。ルイ14世（1638-1715）は、外交政策の一環として磁器を各王室にプレゼントした。このような磁器に対する関心は、ヨーロッパ各国の王室へ広まり、景德鎮の蒐集合戦が繰り広げられた。

ドイツでは、このアウグスト強王とプロイセンのフリードリヒ1世（1657-1713）が、宮廷に磁器コレクションの展示場を開き、その収集品の量を競い合った。とくにザクセン王は、プロイセン王が所有していた展示用の壺のために、自分の竜騎兵（銃をもった騎馬兵）たちと交換したエピソードを残している。このように磁器がプレゼントや外交にも重要な役割を果たしていたのである。

しかしヨーロッパの王侯貴族は、磁器購入のために多額の支払いを余儀なくされ、そのために自前で磁器製造に血道を開けるようになっていった。アウグスト強王は、配下の錬金術師ベットガー（1682-1719、図1）に磁器の製造を促し、マイセンのアルブレヒト城で実験をおこなわせた。

ベットガーはかつて、プロイセンのフリードリヒ1世のもとで錬金術にかかわっていたが、いかさまが露見し、1702年にそこを脱出した経歴の持ち主でもあった。当時、王室では錬金術師が磁器製造にも大きな役割を果たしており、それは文字通り、金を生み出す「打ち出の小槌」と考えられていた。

ベットガーは試行錯誤を重ねながら、磁器の原料の「カオリン」が磁器製造のカギであることに気づいた。かれは「カオリン」をボヘミアのエルツ山地で入手し、1300度以上の高温で焼成し、



図1 錬金術師ベットガー

1709年にヨーロッパ初のマイセン磁器を誕生させる。

強王は翌年の1710年にアルブレヒト城に窯を設営し、本格的に硬質磁器製造に乗り出す。しかし中国産にくらべると技術的には未完成で、最初のマイセンは褐色をしており(図2)、目指した白磁はようやく1713年に完成をみた。



図2 初期のマイセン

マイセン焼きの成功はザクセン王国の興隆をもたらすが、その技術の独占は長く続かない。マイセン磁器の製法に大いなる関心をもった近隣の国王は、職人の引抜きや強制的な拉致すらおこなう。そのため技術はすぐに漏洩し、各地でマイセン磁器が製造されるようになる。たとえばウィーン(1716)、ヴェネツィア(1717)、フィレンツェ(1737)、コペンハーゲン(1737)、ペテルスブルク(1743)でも、同様なマイセン磁器が製造された。

もちろん各国の窯は、その後、独自の発展をたどり、フランスのセブル窯、リモージュ窯、イタリアのジノリ窯、イギリスのウェッジウッド窯、デンマークのロイヤルコペンハーゲン窯などは、現代でもよく知られている。マイセンでの製法は、ふつう900度で素焼きし、次に釉薬を塗り1400度以上の高温で焼き上げて完成させるが、さらにその上に絵付けをして900度で焼成させる場合もある。

なお磁器といっても、さらに硬質磁器、軟質磁器に分かれ、前者はカオリン、長石を1350度以上で焼成するのに対して、後者はカオリンを含まず、温度も1350度以下で焼成する点が異なる。

2.2 東洋の青とヨーロッパの青の融合

ヨーロッパ中世の色彩は、赤色が主流を占め、赤が服飾文化を規定していった。その最大の理由は、赤の染料が容易に入手できたからである。しかし近世になると青が台頭してくる。そのきっかけは、15世紀にマリア像の衣服が白、マントが青く描かれるようになったからである。青は宗教的な世界だけでなく、フランスのカペー朝(987-1328)がブルーの素地にユリ紋章をシンボル化してから、王家にも広がっていった。やがて赤と青の拮抗が続くが、17-18世紀は一般市民も青を好み、ヨーロッパは青の

時代を迎えていた。その背景には青の染料のインディゴが、新大陸の西インド諸島から容易に入手できたことにある。

一方、東洋ではもともとシンプルな白、青の色彩が好まれ、このような嗜好は中国磁器の白磁・青磁を生み出していったが、これらの磁器はヨーロッパにおいても青の流行と相まって愛でられ、アジアとヨーロッパの色の好みが融合していった。

ただしヨーロッパでは、景德鎮は材料や製法の関係から白磁が中心で、青磁はほとんど拡大せず、その代わりに白磁に高温顔料のコバルトブルーの釉薬をもちいて、青色の芙蓉文様をつくりだす作風が主流を占めた。たしかにマイセンの白磁に青というデザインは、アジアの影響を受けたものであったにせよ、ヨーロッパの色彩の嗜好を背景にしていたといえる。

この文様は、ハス、マツ、ザクロ、桃、芙蓉、孔雀など東洋的なものが多く、そのなかでブルーオニオンの成立エピソードは、よく知られている（図3）。これはアジアのザクロや桃を模写する際に、適当な手本がなくこれらを身近なタマネギに見立てたことによるが、最初に描かれたのは1739年であり、人気が出て大量生産されるのは1845年以降である。

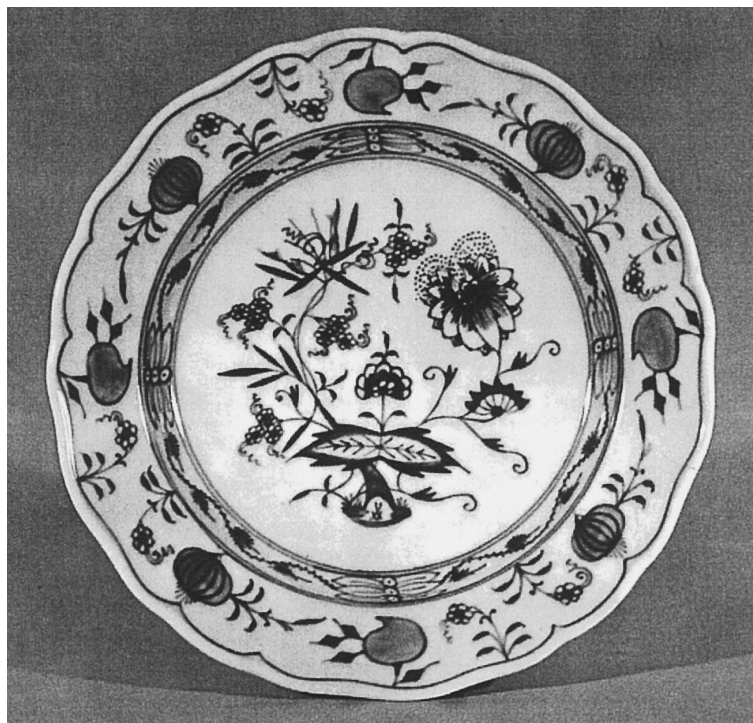


図3 マイセンの東洋的モチーフとブルーオニオン

同じ時代に、ドイツではプルシャン・ブルーが流行し、これは日本の葛飾北斎も愛用した。青に対する好みはその後も続き、現在でもヨーロッパ人の色の嗜好は青がトップである。EU旗の生地が青であるのもこのような理由によるものであるが、マイセン磁器の青の嗜好も、ヨーロッパの色彩文化と深くかかわっていたのである。

2.3 シノアズリーの流行からヨーロッパ芸術潮流化へ

マイセン磁器の受容は、第一段階では1710年代からシノアズリー（中国様式）のモチーフの模倣からはじまった。それは先進技術を習得するためには必要なステップであった。磁器のモチーフは中国風の花、芙蓉、風景、人物図案、竜、人形が手本にされ、これらが異国趣味としてもてはやされた。その後流入した日本の伊万里の梅や菊をモチーフにしたものもマイセンで好まれた（図4）。これは赤を基調としていたが、赤もヨーロッパ人の派手好みの色彩趣味に合致した。

当時でも磁器は陶工だけでなく、画家による絵付けがセットになっていた。ベツトガー亡き後、マイセン窯の後継者となったケンドラー（1706-75）は、絵付けの才能に優れた画家でもあった。このシノアズリーや日本趣味の模倣のプロセスから、ヨーロッパとの混交文化が生まれ、それは現在にも継承されている。たとえば前述のブルーオニオン、中国で好まれていた竜などはその典型である。とくにポットの注ぎ口に竜をアレンジしたものは、噴水にも見られるが、東洋趣味として人びとの話題になった。

しかし18世紀なかばからマイセン磁器の作風は、シノアズリーの模倣をしないで脱却し、ヨーロッパ人好みの華麗なロココ様式へ移行していく。というのもヨーロッパには、すでに陶器の高度な絵付け技術が発達していたからである。その後、マイセン・ブランドは、ザクセン王室の紋章に由来する交差剣マークによって維持されてきた。これは現在にも継承され、マイセンの鑑定に応用されていることでも知られている。

さてヨーロッパの芸術潮流は、さらに王侯貴族のロココからブルジョアの新古典派、アール・ヌーヴォーに変化し、モチーフはそれに対応していった。これらのうち、とくに調度品にそ



図4 伊万里の日本風モチーフ

れが強くあらわれ、図に示すような華麗な花図柄が好まれた(図5)。とくにバラ、アネモネ、チューリップは、食卓の雰囲気をも高める効果を醸し出した。



図5 花柄のティーポット

3 ヨーロッパの食文化と磁器

3.1 王侯の宴会とマイセン磁器

ヨーロッパの王侯は、中世以来、気前のいいことが重要な資質とされた。臣下の契約、結婚、戴冠式など儀礼の際には、大盤振舞をするのが慣わしであった。下賜の品、罪人の恩赦もそうであるが、何よりも人びとが喜んだのは食事の提供であった。図6に示すのは、マクシミリアン2世の戴冠式(1562)の際に、臣下に振舞われた牛の丸焼きである。このようなイベントによって、王侯は太っ腹の気前のいいことをアピールし、政治的支配の安定を意図したのである。

景德鎮やマイセン磁器がヨーロッパへ流入する以前の15-16世紀では、王侯貴族の宴会に用いられた食器の花形は、銀製品、金メッキ皿、錫製であった。それがステータス・シンボルとみなされていたからである。しかし金属を食器として用いるのは、実用性からみるとあまり好ましいものではなかった。というのも、これは熱伝導率がよくて、熱をすばやく放出するという特性があり、保温を重視



図6 戴冠式用の牛の丸焼き

するヨーロッパの食文化とは相反するものであったからだ。

中世ではナイフとフォークが発達せず、王侯貴族でも手でつかんで食事をしていた。なおその後も銀製のナイフ、スプーンに残っていたが、ただしフォークが食卓に登場するのは、ヨーロッパではかなり遅く、17世紀以降である。たとえば太陽王といわれたフランスのルイ14世は食事中、よく手で食べていたという記録がある。その際、食事中、あるいは食後に手を洗う習慣があるので、それにも華麗な模様のフィンガーボールが好まれた。

図7に示すひな壇のような当時の食事風景は、正面から給仕する方式であり、このような構図は多い。この座席配置は、中世の封建的体制の上下関係を如実に示すものでもあった。そのような封建時代の食事方式では、楽士が重要な役割を果たし、娯楽を提供したが、対話式の座席ではないのでコミュニケーションは十分できず、形式的な晩餐会というかたちで終わることが多かった。

図のような座席配置は、背後から毒薬を仕込む危険性を排除する意図があったといわれている。一説には磁器がもてはやされるようになった理由に、磁器は毒を盛られると色が変わるといふ風説があったからである。とくに王侯貴族は、暗殺を恐れ、毒に対する警戒心が高かったとされ、それが食事の座席にも影響していたことがわかる。招待された場合、毒味役を同行させたという事例もある。

王侯の食事において、16世紀あたりまで、メインの肉料理はまるごとテーブルに出されて料理人によって切り分けられ、その他の料理もそのまま一緒に並べられた。し

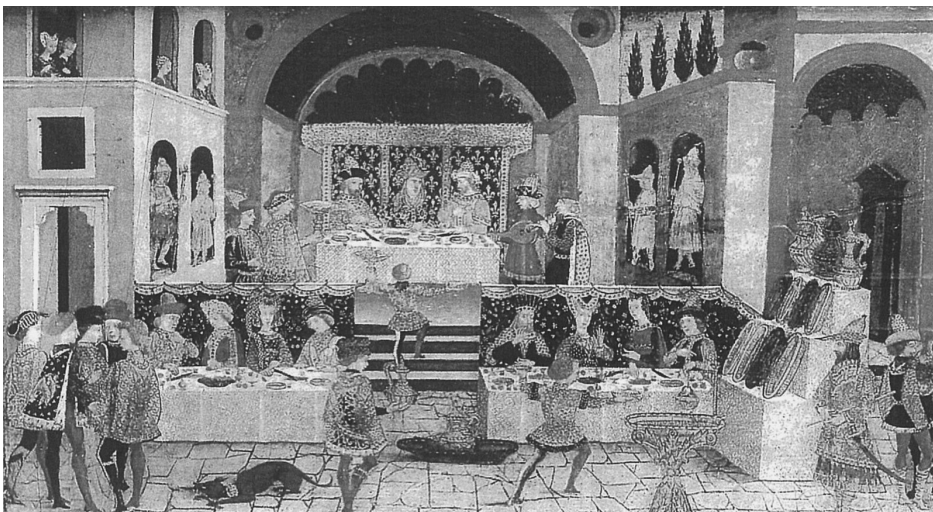


図7 15世紀の宮殿での宴会

かし17世紀のルイ14世の時代から、フランスでは料理はスープ、オードブル、メインといった料理ごとに3回に分けて、給仕が運んだ。さらに19世紀になると、ロシア式の一部ずつテーブルへ運んでくる方式が変わった。ロシアは寒いので、暖かい料理を食べるために、このような配膳をしていたのである。

3.2 華麗な食卓を飾るマイセン

17-18世紀にも専制君主は晩餐会をよく開いたが、ここではとくに王侯の権威を誇示するために、景德鎮、マイセン磁器が重要な役割を果たした。視覚的にみせる料理、食卓がかれらの財力を示す、ステータス・シンボルとしてきわめて重要であったからである。王侯はそのために最高の料理人を雇い、食器類を取り揃え、見せびらかした。食卓を花で飾るためには、華やかな大きな花びんも愛でられた。

図8にあるように宴会には多くの見物人が出席しているが、かれらは実際に食べることはできなかった。ここに示すのはヨーゼフ2世の選帝侯選挙の宴会（1764）風景であるが、王侯の一族、聖職者だけが坐り、あとはみんな立っている。これは現在からすると奇妙な光景といえるが、豪華な食事の風景を見せることが、重要な政治的パフォーマンスであった時代を物語っている。

したがって宮廷文化のなかで、華やかな磁器製の置物、食器は、演出をするために重要な意味をもっていた。そのなかには紋章図柄入り磁器があり、ケンドラー作のザクセン王室の紋章と、王の肖像画入りのものが有名である。ロシア王室も紋章入りの食器を注文した。図9に示すのはエカテリーナやヨーゼフ1世の紋章が焼き付けられたものである。

またテーブルに飾る食卓用フィギュアも華麗なマイセンでつくられた。とくにザクセン王室の祝宴では、中央にマイセン製のセンター飾りを据え、華やかさを演出した。現物ではなくスケッチであるが、図10にそのデザインを示しておこう。なお燭台にもマイセンが用いられ、食卓に華やかな雰囲気盛り上げた。

マイセン独自の技術を駆使した作風として、スノーボールと格子模様、立体装飾が有名であるが、食器のモチーフで好まれたのは、見栄えのするバラ、アネモネ、チューリップという花、風景画、人物画である。とくに派手なロココ様式の食器は晩餐会には不可欠であった（図11）。テーブルにも飾り像が置かれ、はなやかな雰囲気がつくられたが、そのみならず大広間に食器を飾る習慣もあった。このようなヨーロッパの芸術潮流は、宮廷文化を背景に生み出されてきたのである。

その後、ヨーロッパにおいてブルジョアが台頭し、かれらは王侯貴族の伝統を継承

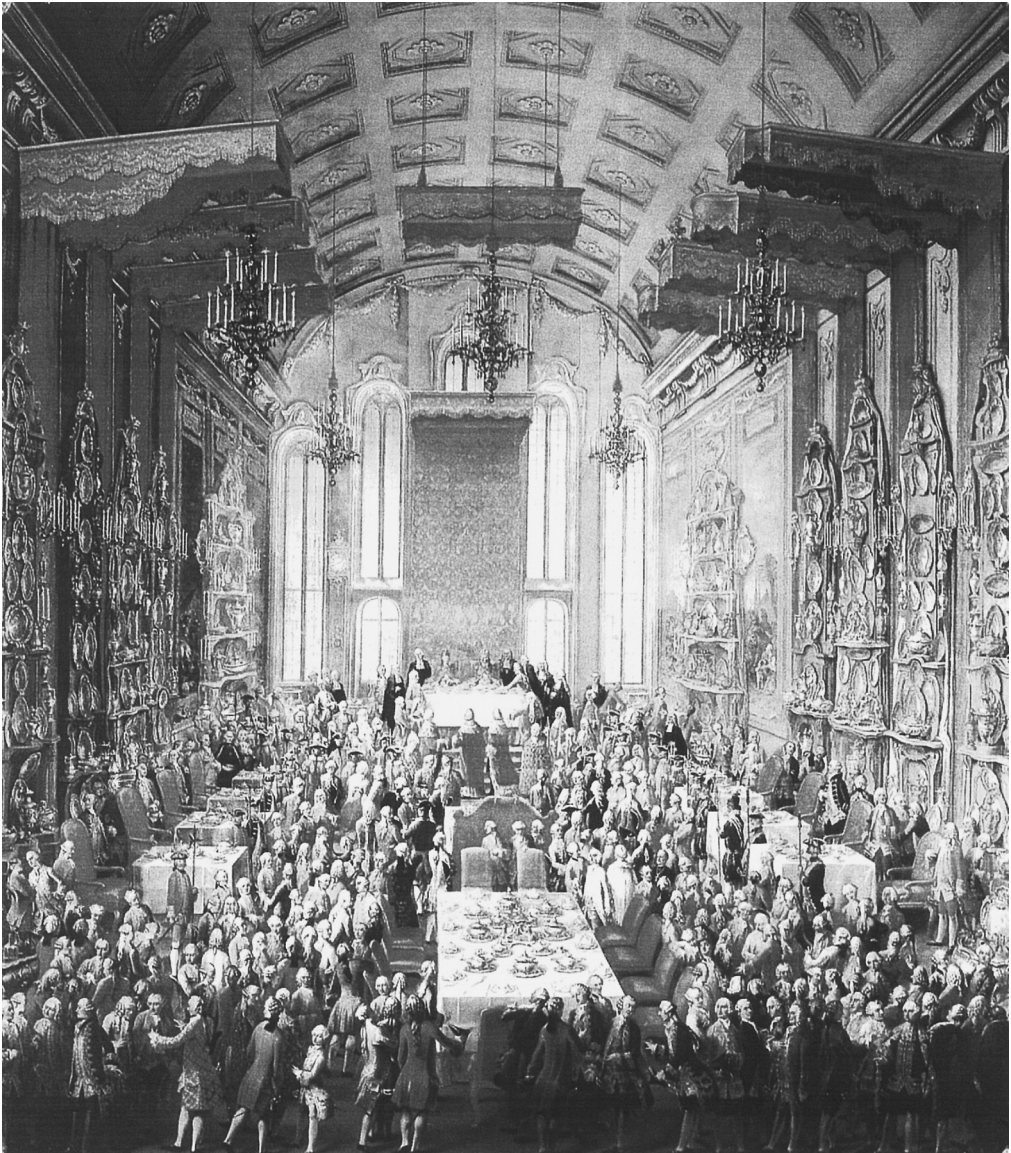


図8 ヨーゼフ2世の選帝侯選挙の宴会

するとともに、新しい世界観をも打ち出した。すなわち、食文化においては豪華な食器、盛り付けは、王侯貴族文化の継承であるが、ブルジョアはテーブルを円形にし、王侯貴族の序列と異なった、新しい平等の価値観をここに盛り込んだのである（図12）。またサイドテーブルに食器を置き、先述した北国のロシアの一品ずつテーブルに出すという給仕方式は、ヨーロッパの宮廷やブルジョアの食卓でも広まった。



図9 紋章入りティーセット



図10 センター飾りのスケッチ



図11 花図柄の皿

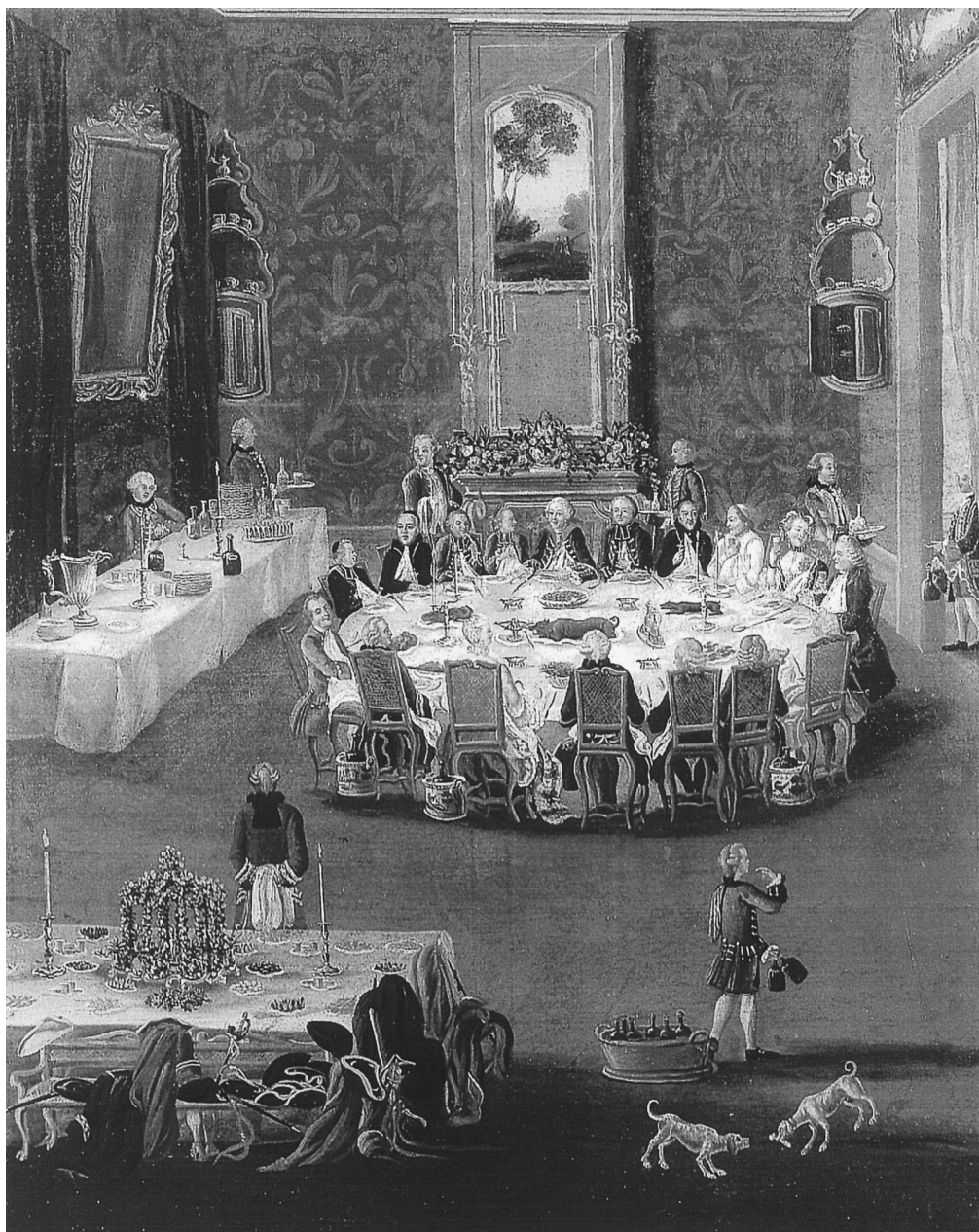


図12 円形テーブルでの宴会

3.3 宮廷サロンの文化と磁器

17-18世紀のルイ14-15世の時代に、宮廷や貴族の館で女性を中心にしたサロンが開かれた。ルイ15世の愛妾であった才色兼備のポンパドゥール夫人がその代表的女性

であるが、サロンを主宰した女性たちはパトロンとして経済的援助を行い、芸術家を育成してロココ文化を生み出した。

文化人が音楽、文学、ダンス、会話、恋愛、人的交流をもとめてサロンに集まり、そこで洗練された教養を競いあった。またサロンに加わることが上流階級のステータス・シンボルであった。女性たちは美しく着飾り、エスプリの効いた会話を楽しんだが、無骨な男性はそこには参加できなかった。フランスのパリがサロンの中心であり、ここに宮廷貴族の文化が花開き、ヨーロッパ王室の手本になった。

サロンの文化と密接にかかわるが、ポンパドゥール夫人はマイセン磁器や柿右衛門に対しても大いなる関心を示した。かの女はフランスのヴァンセンヌ窯を支援し、1756年にパリとヴェルサイユの間のセーヴルに窯を移し、いわゆるセーヴル窯のスポンサーとなった。

ひと際目立つのはセーブルの金彩をほどこした食器である。金彩はマイセンにもあるが、やはり有名なのは、ポンパドゥール夫人が主導したセーブル焼きのそれである。当時のロココ時代とも重なるが、視覚的な面からも、金彩はきわめて目立つものとして多用された。かの女のセンスがこの窯で活かされ、色彩豊かなセーヴル焼きはマイセンと並ぶ名声を得ることになる。これは1759年から革命まで、フランス王室窯となった。なおこの窯はフランス革命の間に破壊されたが、1804年にナポレオンが再建したことでも知られている。

セーブル焼きを通してポンパドゥール夫人は、フランスにおける軟質・硬質磁器製造に大きな貢献をなしたといえる。とくにその色彩の特徴はブルーと薔薇である。ブルーはブルボン王朝のシンボルカラーであり、いわゆる「ポンパドゥールの薔薇」はかの女の好んだ薔薇色にちなんで名付けられた。

宮廷サロンでもコーヒー、あるいは紅茶がケーキとセットで飲まれることが多かった。チョコレートも珍味であり、上流階級で愛でられ、さらに当時、宮廷でも嗅ぎタバコが流行した。そのためにケーキ皿、チョコレート・カップ、砂糖入れなどの小物、嗅ぎタバコ入れが必要となり、高級品はマイセンやセーヴル磁器でつくられた。このような新しい食文化の発達は、磁器の需要を増大させた。

3.4 カフェハウスの文化とマイセン磁器

王侯の宮廷文化と並行して、ヨーロッパで発達したコーヒー・紅茶文化も、磁器と密接な関係にある。ヨーロッパでは新しい飲物が一部の王侯貴族に注目されたが、それがしだいに一般市民にまで浸透し、ブームになったからである。コーヒーと紅茶の

文化がカフェハウスを生み出し、トーク、議論の習慣が重要視された。その意味において、17-18世紀のヨーロッパのコーヒー文化とコーヒー・ハウス（カフェハウス）について概観しておきたい。

まず近代初期のヨーロッパでは、17世紀以降、飲み物はビール・薬草茶からコーヒー・紅茶へと変化していった。イギリスでは17世紀ごろ、中国産の緑茶に砂糖を入れて飲んでしたが、やがてウーロン茶の進化した発酵茶、すなわち紅茶が主流となる。その際、砂糖とさらにミルクを入れて飲む方法が好まれている。

同時にイギリスではコーヒーも好まれ、コーヒー・ハウス（1652）がつくられたが、18世紀の最盛期のロンドンには3000軒もあった。ここは女性の入室が禁止され、男性のみの社交場となっていたが、後にこれらはバブに変わっていった。コーヒー・ハウスから締め出された女性たちは、庭園でのティーガーデンに集まった。イギリスでもウエッジウッドの窯が繁盛したのは、このような嗜好品の文化があったからである。

さて17世紀の大陸では、オランダが紅茶とコーヒーの輸入を支配していた。最初、アムステルダムにイエメンのコーヒーが輸入されるが、オランダは自前でコーヒーを生産するために、ジャワでプランテーションを設営（1680）し、植民地経営に乗り出す。こうしてオランダの東インド会社がコーヒー豆を独占し、バタヴィアからアムステルダムへ輸入された。

イギリスはオランダからコーヒー豆を購入していたが、外貨節約のため、植民地のセイロンで紅茶を生産し、それを輸入するようになった。こうしてイギリスは、コーヒー文化から紅茶の文化へと転換した。その後、スペイン、ポルトガル、フランスがブラジルでコーヒーのプランテーションを経営し、コーヒーの生産拠点は南米へ移った。この経緯がイギリスは紅茶、大陸はコーヒーというヨーロッパの食文化を規定した。

カフェハウスはロンドンからパリ、ウィーン、ローマ、ヴェネツィア、フィレンツェなどのヨーロッパの各都市に広がっていく。コーヒーは覚醒作用があり、勤勉さをモットーとするプロテスタント精神とが一致し、ドイツやオランダでも好まれた。とりわけドイツは、もともとビールが飲料として普及していたが、北方のプロテスタント地域では、飲酒は宗教的に批判され、コーヒーの「覚醒作用」の方がビールの「酩酊作用」に打ち勝った。

ところがコーヒーは、大量にオランダを介して輸入されたので、プロイセンのフリードリヒ大王（1712-1786）は、外貨不足を解消するという理由から、コーヒーを禁止した。ここでは代用コーヒーが推奨されたけれども、本物のコーヒーの味を知った

人びとは、ひそかにコーヒーを手に入れようとしたので、国王のこの政策は失敗した。バツハ（ライプツィヒ時代）は「コーヒーカンタータ」でカフェハウスやコーヒーを飲むことを賛美し、この習慣が家庭へも拡大していった。まさしくコーヒーや紅茶が市民階級へ浸透するにつれ、各国の磁器窯は大きく発展することになる。

このようにコーヒー文化は、またたくまにヨーロッパ大陸へ波及し、パリやウィーンのカフェが一世を風靡した。それは18世紀の啓蒙主義の風潮ともあいまって、人と人とのコミュニケーションのあり方を変える役割を果たした。ここでの人びととの交流や情報交換は、世論の形成を促し、ヨーロッパの市民社会を成熟させたといえよう。

4 ヨーロッパの食習慣と磁器

4.1 保温

日本より緯度の高い寒冷地に住むヨーロッパ人は生活の知恵として、熱いコーヒー・紅茶を好む。食事メインの料理の温かさをたえず気にする。家庭に招待されると、主婦は保温に細かい配慮をしてくれ、そのため現在では温熱プレートの工夫がなされている。いうまでもなく磁器は保温効果が高く、ヨーロッパの食卓向きであり、それは磁器食器がヨーロッパに広がった最大の理由である。なおコーヒー皿セットのひとつであるソーサーも、保温に一役かっていたことがわかる。

庶民は安い陶器製の食器を利用したけれども、王侯貴族やブルジョワは磁器製の高級品を好んだ。とりわけ磁器製ポットは、保温に最適であり、さらにロウソクの熱を利用するウォーマーが開発され、これはかれらの保温目的に合致した。ヨーロッパ人は自分たちの好みの品を中国に注文した。

たとえば図13に引用したロココ風の保温式ティーポットを見てみよう。これは華麗な花をモチーフにしたポットであり、下のウォーマーのロウソクに点火し、ポット内の温度を適度に保つタイプである。ちなみにロウソクは、現在でもヨーロッパの日常生活のなかでは必需品であり、ここにも日本とまったく異なるロウソク文化が認められる。

大鉢、小鉢でも蓋付き食器がかなり多く目に付く。蓋は料理の保温の目的に考案されたものであり、磁器の保温性とあわせて、北国の生活の知恵がここからもうかがい知ることができよう。

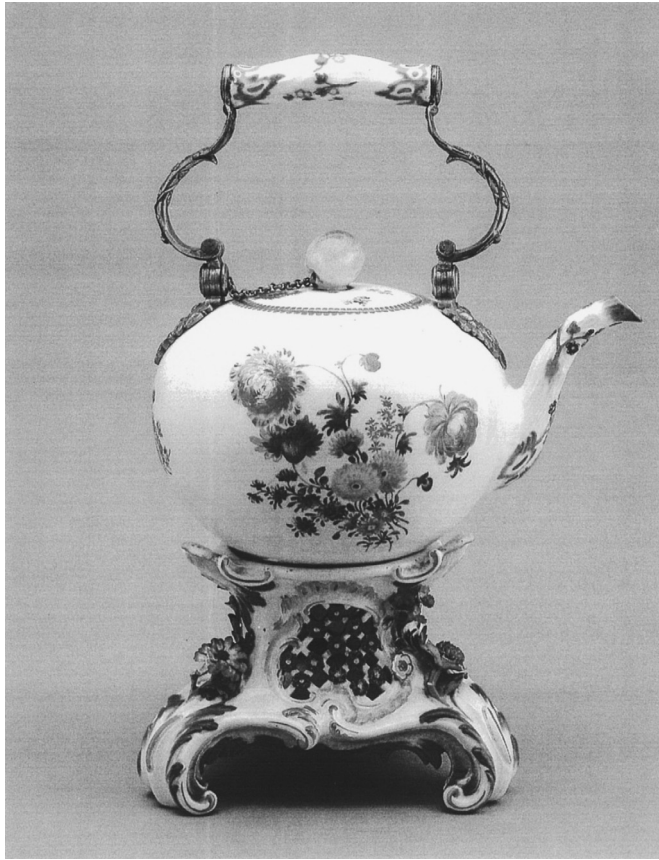


図 13 保温式ティーポット

4.2 実用性

コーヒーカップ、ティーカップには陶器製と磁器製があるが、好みの問題とはいえ、薄い磁器製のものが高級感を与える。ヨーロッパのコーヒーカップやティーカップにはかならず取っ手が付いているが、それは一見当たり前の形状として、だれしもほとんど気にも留めない。

ふつうコーヒーは95度、紅茶はできるだけ高温の沸騰水で入れるが、それに比べると高級茶ははるかに低温である。熱いコーヒーや紅茶の入ったカップを直接手にもつことはできない。したがって必然的に取っ手が付けられるということになる。

ただしごく初期のマイセンは、アジアの模倣から取っ手のないカップを製造していたが、後には実用面からすべて取っ手が付いている。同様にスープも熱くして、皿ではスプーンを使う。本来、スープは飲み物ではなく、食べ物であったが、直接飲む目

的の食器には、取っ手を付けるという形状を生み出した。このようにヨーロッパの風土に合わせて、食器類を製作していたといえる。

これに比べて、日本茶はそれほど高温で入れないので、手で持っても熱さを我慢できる。したがって茶碗は取っ手を付けない。事実、東洋からヨーロッパへ流入した磁器カップのうち、初期のものは取っ手もないものがあるが、1730年代にすでにヨーロッパでは、コーヒーカップはほとんどすべて、取っ手が付いている。それはコーヒー、紅茶用という実用面からみれば当然のことといえる。外見的な形状も、コーヒーや紅茶と緑茶という原料の特性と飲み方によって規定されていたのである。

この取っ手のあるコーヒーカップは、実用面以外にもヨーロッパの掴むという文化と深い関係がある。大陸では確実に掴んで我がものにするという習慣があるからだ。たとえばヨーロッパでは紋章の図案でも、猛獣のライオン、強い熊、猛禽のワシなどが好まれる。そこには爪までも描かれることが多いが、これはしっかり獲物を掴む動作を示している。

それに対して、茶碗は手に持ち、その際、やわらかく包み込む動作をする。これは日本独特の包む文化をあらわしているのではなかろうか。かつてのふろしきに代表される柔軟な包む文化とつながっているように思える。家紋でも丸みを帯びた優雅な形状が多い。そのような繊細な感覚がカップと茶碗という容器の形状にもあらわれていると考えられる。この比較はヨーロッパが「剛の文化」、日本が「柔の文化」といわれるゆえんであろう。

4.3 目的別使用

ヨーロッパでは食器は料理、飲み物の種類によってそのつど変える。たとえば家庭では、コーヒーカップ・セット、紅茶カップ・セット、スープ皿、ビール用グラス、ワイン用グラス、シュナップス・グラス、各種料理用皿など目的に合わせて多数そろえている。その多様さが一種のステータス・シンボルとみなされている。

日本でもお膳で個別に食事を分けて食べる習慣があるが、鍋物をみんなでつつくとか、返杯、回し飲み、おわんや皿を多目的に利用するということも、かつて伝統としておこなわれていた。この食事方法は、日本の家族主義、集団主義と密接にかかわっている。

ヨーロッパの中世では、中央に大皿を置き、それから家長が分配したり、ナイフで切り分けたりしていた。しかし近代になるとこのような習慣は変化し、テーブルでは各人が大皿から欲しいだけの分量を取り分ける。食卓でも個人用に盛り付ける。フォ

ンデュ鍋ですら、自分のクシを色によって特定して使用する。

この食習慣の根底には個人主義が深く影響していると考えられる。個人主義はルネサンス以降、ヨーロッパで成立・発展してきたが、それは食卓の日常習慣にも影響を与えていることは否定できない。以上のような日本文化とヨーロッパ文化を背景に、マイセン磁器の形状を分析するのも、比較文化論として興味深い。

まとめ

本報告ではヨーロッパとアジアの東西交流とのかかわりから、アジアの磁器文化、とくに景德鎮やその影響を受けた伊万里のヨーロッパ受容を歴史的に跡付けてみた。ヨーロッパではアジアの磁器が高く評価され、宮廷のみならず市民までもが、これを競って入手しようとした。しかし輸入品だけでは満足できず、ヨーロッパは、先進的なアジアの磁器技術を吸収し、すぐさま自力で磁器を生み出していった。こうしてマイセンに根付いた磁器技術は、その後、ヨーロッパ各地に伝播し、独自の発展をとげたが、現在、発祥の地であるマイセン・ブランドは世界に知れ渡っている。

このようなアジア磁器の受容史は、従来、すでにヨーロッパや日本でも紹介され、先行研究もある。ただし磁器文化の研究は、ただ目先の食器に目を向け、異国趣味を受け入れた歴史的な経緯だけに限定されるものではない。ヨーロッパとアジアの磁器交流史は、ヨーロッパの宮廷政治、食卓文化、コーヒー、紅茶などの食文化、サロンやカフェハウス、気候条件、ヨーロッパ人の思考方法など、複合的な文化要素の上に成り立っていたことがわかる。

したがって磁器文化も、時代の政治、文化、風俗・習慣を包括するトータルな視点から考察する必要があるが、ただし以上のような観点からの研究は、まだ筆者の知るかぎり今まで存在しなかった。本報告は後者のささやかなアプローチの試みであるが、このような複合的な展開によってはじめて、器をめぐる食文化の全体像が把握できるものとする。

参考文献

- Andressen, B.M.: Barocke Tafelfreuden, Niederhausen 2001.
- Gercke, H.: Blau, Heidelberg 1990.
- Meier, G.: Porzellan aus der Meissener Manufaktur, Berlin 1981.
- Neuwirth, W.: Meissener Marken, Wien 1980.

第4部 食文化を通して見たアジア・世界の出会い

- Pietsch, U.: Frühes Meissener Porzellan 1994.
Sonntag, H.: Die Sprache der Blumen, Leipzig 1995.
Sterba, G.: Meissener Tafelgeschirr, Leipzig 1988.
Walcha, O.: Meissener Porzellan, Dresden 1973.
ヤン・デイヴィシユ：『ヨーロッパの磁器』濱野節朗・他訳 岩崎美術社 1997年。
三杉隆敏：『マイセンへの道』東京書籍 1992年。
三杉隆敏：『海のシルクロードを調べる事典』芙蓉書房出版 2006年。
『ロシア宮廷のマイセン磁器』カタログ（エルミタージュ美術館所蔵）朝日新聞社 1997年。